

『ローマの休日』とキーツ

——映画と詩人——

日時 2021年4月3日(土) 13時

場所 うつのみや妖精ミュージアム

講師 井村君江(妖精ミュージアム名誉館長)

(1) 『ローマの休日』(Ruman Holiday 1953年)

監督ウィリアム・ワイラー、脚本家ダルトン・トランボ(発表の25年後に、トランボの原作が認められる)。王女と新聞記者の会話で王女のお気に入りの詩の作者を、イギリスの詩人キーツかシェリーかと問答。

* Arethusa(「アレトゥーサ」泉の精(Arethusa arose/From her couch of snows/In the Acroseraunian mountains) (「アクロセラニウム山の雪のコーチから、アレトゥーサは身を起こした」 Shelley; Arethusa 1連1-3行。

ラストシーンは、歌劇「トスカ」のサンタンジェロ城の広場を使用。(トランボの教養の現れ)。

* イギリスの詩人暖い南イタリアを自分の地方。詩人コミュニティ(バイロン、ハント、ホッグ)。

題名『ローマの休日』観光客の見物。「ローマ人の休日」(『スパルタカス』)

ローマ人=多忙、犠牲的=剣闘士、王女。

(2) キーツとシェリー(イギリス19世紀ローマン派を代表する2詩人)

◎ジョン・キーツ(John Keats 1795-1821)

ロンドンの馬車屋の息子。婚約者ファニー・ブラウンへの恋文と詩、ローマで結核で病死。

医師ジェームス・クラークの看病、絵画師ジョセフ・セヴァーンの腕の中で死亡、25歳。

ファニー翌日イギリスより来て、セヴァーンとキーツをローマのイギリス人墓地に埋葬。ファニーは結婚し、子供3人もうける。映画より現実的、ロマンチックでない。

* 「レイミア」(1819)「秋によするオード」(1820)「ラ・ベル・ダーム・サン・メルシー」(1819)

◎P.B. シェリー(P.B. Shelley 1792-1822)

サセックス、貴族の息子、6人兄弟の長男、オックスフォード出身、女性問題、アイルランド革命、政治・恋愛の自由、詩人、評論家、劇作家。2人目の妻メリー『フランケンシュタイン』の作者。子供4人、1人目の妻ハリエットは2人。イタリアのレリチで遭難。

10日後ヴィアレージョで死体発見。ポケットにはキーツの詩原稿「レイミア」。バイロン、ハント、トレロニー葬儀。ボート「ドン・ジュアン」号、キーツのローマの墓地の隣りに埋葬。

* 「アドネイアス」(1821)「ローマに行け、そこは墓、おお、そこは彼のではなく喜びの墓」

「西風へのオード」(冬が来たら、春はまだ遠いということがありましようか)。

(3) 墓碑名——ジョン・キーツ「水にもの書きし者ここに眠る」(Here lies one whose name was writ in the water) (writは碑文どおり)、パーシー・B.シェリーの墓石には「心の心」(Cor cordium)というラテン語と、シェイクスピア『テンペスト』のエアリエルが歌う一節「その身はこうして朽ち果てず、海はすべてを変えてくれ、尊く不思議なものになりました」(Nothing of him that doth fade, But doth suffer a sea-change,/ Into something rich and strange)がある(1幕2場)。父の骨は珊瑚になり、両目は真珠になり、海はすべてを変えるという意。ボートの名前は「ドン・ジュアン」号でなく「エアリエル」号と付けたかった。

(4) スペイン広場——ヘップバーン(王女)は美容室でカット、アイスクリームを食べるシーン。

階段頂上近く右側——キーツ療養、死亡した家、「キーツ、シェリー美術館」。